

全体討論

司会(盛山)：大谷先生から、関学とか桃山大の社会調査士のためのカリキュラムについて大変参考になる有意義なコメントを頂きました。ではこの後引き続いて、自由討論にさせて頂きたいと思います。どうぞご遠慮なくご発言下さい。

佐藤(東大)：今、日本語の調査票を英語に翻訳するというようなお話があったんですけども、我々のSSJ データアーカイブには、英語のホームページも作ってあります。しかし、調査票まで翻訳するかどうかについては、いろいろ議論があります。すべて英語に直してあげて英語だけで分析できるような研究環境を用意するのが、良いのかどうか。日本語ができないとやはり誤解に基づいた分析が行われる可能性が高いことを危惧しています。日本語がある程度できて、報告書が読める、そういう人に使っていただくとう当面は考えています。ただ試験的に、日本生命保険文化センターの「日本人の価値観調査」については、調査票を、意味レベルで同じ内容に説明的に翻訳する作業を始めてます。日本語のわかる外人と、英語のわかる日本人と研究会を作って、そこで意味レベルで同じように説明できるようなものを徐々につくっていくことを進めています。

大谷：そうですね、なかなかうまく行かないんじゃないかなと思います。ISSP なんかの翻訳でも、ほんとにこれで日本人に対して測定可能なのかな？という場合も見受けられます。しかし、日本語と英語でコミュニケーションできる人が議論して調査票を練っていったり、そういうことを議論すること自体はかなり、国際比較の研究をやる上では役に立つんじゃないかとおもいますが、なかなか難しいですね。

金：社会調査には素人ですが、さっき何方かお話した社会調査データの二次解析について私見を述べさせて頂きます。私の当面の研究分野は計量文体学ですが、英語ではStylometry と呼びます。この分野ではかなり昔から公開されたデータを有効に利用しています。例えば、Shakespeare の文章に関するデータは何十年も前から二次解析が行われ、その解析の論文が統計学関連の有名なジャーナルに発表されています。二次データ解析の論文で博士学位を獲得しているケースもあります。データ解析を専門とする方々が、社会調査関係の論文を読むとデータ解析に関して疑問を持っているものが少なからずあると思います。もし利用可能なデータが公開されていれば、さまざまな角度からデータ解析が行われ、何らかの新たな知見が見られるかもしれません。一方、データの公開は社会調査の教育にも大きく役に立つと思います。社会調査の講義で、社会調査票の作成からはじめ、調査、そのデータの解析までの一連のプロセスを教えるのは非常に難しいことです。もしデータがあれば、何らかの側面から社会調査の教育を行うことも可能ではないかと思います。社会調査のデータの公開に関する研究・実務がスムーズに進むことを期待しています。

司会(盛山)：はい、どうもありがとうございました。

小内：先ほど社会調査士の話が出ましたけれども、実際に資格を取った場合に、就職の時の効果っていうのは、どの程度あるものなのでしょうか。

大谷：いまのところよくわからないというのが本当のところですね。関学の場合には、社会調査士を取った学生自体少数ですので、関学

では、社会調査士制度が、オープンカレッジすなわち社会人の公開講座としても開講されています。学生よりはむしろ社会の方が熱心なようです。桃山学院大学の場合も、制度化して3年目で来年社会調査士がでるという段階です。

仁田：その社会人の方っていうのは、どういう方が聞かれるんですか。

大谷：それもあんまり人数が多いわけではありませんが、企業をリタイアされた方や、主婦の方もいれば、いろいろです。

盛山：ちょっと私の方から、一言発言させて下さい。私ども社会調査関係の授業等で、こう考えたほうがいいんじゃないかなあと思っていることは、今、社会の現場において、社会調査という現象が、どういうところで、どの程度、どういう人々によって担われているのかということを知る必要があるだろうということです。私は研究者のお仕事はともかく、随分知らないという印象があります。我々はいつも研究用の調査を念頭において考えて、そのための訓練をさせたいということをずっと考えるんですが、卒業生なんかの話を聞くと、全然それと関係ないところに就職したと思ったのが、いつのまにかそれを専門にやらされているというケースが結構ある。ということを見たりしていると、社会の現場における、その調査というものです。調査への需要の状況がある。そうすると、そういうところに就職していく学生、学部卒業者たちに必要な知識とか技能とかですね、そういうところをどういう風に設定するかっていうのが必要です。それは、きっと我々の、いわばマーケティングじゃないかなあという印象を最近ずっともっています。

石井：今日の話っていうのが、午前中は当然なんですけど統計的な加工を施すような社会調査っていうような基準からの話が主流になっていたように思います。しかしながら質的調査に関しても、自由回答の部分をかなり

データ化できるのではないかと考えています。従って、素データも単に統計的なデータにこだわる必要はないのではないかと考えます。また、統計的なデータ処理に関しても簡単に処理することができる一方、その相関がいかなる因果的關係なのかを考えるような統計学の基礎的教育も大事なのではないかと痛切に感じて思います。

井上：今のことと関わりますが私は石井先生と4月から「社会情報調査実習」を担当することになっていまして、切実な問題なんです。基本的なところで、先ほども言いたかったことは、なぜ調査するかというと、意外なことが分かるとか驚きがあるからで、そういうことがなければ、調査として意味のある成果を得ているとは言えないのではないかと思います。だから、教えている側も教わっている側も面白くないような調査はなるべくしたくないということです。何かやってそこに意味が感じられるというような、フィールドワークをやっていききたいと、これは調査実習の中でもできるだけいろいろそういう風にしてきたいなあ、個人的に考えてます。

小島：私も基本的にそうだと思ってますよ。ただ、やっぱり価値を持つのはね、つまらない調査の積み重ねの連続ですよ。ほんとにそのとき面白いと思っても、あとになるとまるっきりなんでそんなことやったんだろうと自分が首かしげちゃう。だから私は、こんなこと言うのもちょっと恥ずかしいんですけども、やっぱりね、つまらないことの積み重ねが研究だと思ってますね。

井上：例えば大河内一男さんのなさった調査とかですね、当時の社会状況を今掘り起こしてみても面白くない仮説があって戦時動員体制の継続性を実証する観点から当時の労働調査が意味を持つという風なことがあれば、それはやはり調べてみる価値があるというものではないですか。だから、やみくもにやればよいとは思いません。

小島：だから、この社研の人がいる前で言うのもなんですけれども、社研が一番輝いてた時期ですよ。おそらく素データが公開されて、労働市場なんかの新しい分析のあたりをやればかなり違った、むしろ大河内一男なんか言ってたのは間違いだというぐらいのものが出てくるんじゃないかなという気はしています。そのくらい貴重なデータだと、だからやっぱりそういう、つまんないやつも積み重ねなんだろうって思います。ただやっぱり個人的には面白いことをやりたい、別のことを発見

したいという意欲は常にあるんだけど、調査をやってみるとやっぱりそれはできないですね。想像以上のことが分かったなっていうのはほとんどないですよ。

司会(盛山)：大変面白い話ではありますが、時間がまいりましたので、ここでワークショップを終わりたいと思います。最後に、本ワークショップでご報告下さいました方々、議論に加わって下さった方々、そしてご参加下さいました皆様への感謝を込めて拍手で終わりたいと思います。